

2023年8月27日 説教「愚かな金持ち」

ルカの福音書 12章 13～21節

今朝も「自分の日を正しく数える」(詩篇 90:12)に関連して、ルカの福音書にあるイエスのたとえ話から学びます。

1. 豊かな人の要望とイエスの応え (13～15節)

- ①兄弟に話して下さい (13)「**群衆の中のひとりが、『先生。私と遺産を分けるように、私の兄弟に話して下さい。』**と言った。」

遺産を巡る兄弟との争いといえば、すぐに思い出されるのが、エサウとヤコブのことでしょう。長子の権利をヤコブに譲ってしまった兄エサウ。一方、権利を奪い取ってしまったヤコブは、エサウから逃れて、長い年数を北の地で暮らしました。今朝のたとえ話に出てくる人は、兄弟間に確執があったのでしょうか。遺産分割の仲介をイエスに依頼したのです。

- ②誰がわたしを (14)「**すると彼に言われた。『いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。』**

イエス時代のラビ(教師)達は、こうした案件を持ち込まれることが、よくあったようです。イエスもラビのように受け取られて、要請されたのです。しかし、イエスはこのような調停を安易に受け入れません。ご自分は、彼らの裁判官にも調停者にも任命されたことはないと言明されます。イエスはこの世の裁判や調停ではなく、世の終わりの裁きのために来られたことを相談者は知らねばなりませんでした。

- ③貪欲に注意し (15)「**そして人々に言われた。『どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。』**

イエスはこの男の本性を見破っていました。この男の最も大きな問題は、ここに出て来る「ゾーウェー」(永遠の命とも訳せる)という大切ないのちを、目に見える財産に置き換えてしまっていることでした。彼の心の内にあるのは貪欲そのものでした。主イエスは「どんな貪欲にも注意し、警戒しなさい」と戒めておられるのです。

2. より大きな倉を建てた金持ち (16～18節)

- ①金持ちのたとえ話 (16)「**それから人々にたとえを話された。『ある金持ちの畑が豊作であった。』**

イエス・キリストによるたとえ話は一人の大規模農業を行う金持ちについてです。そこに何が植えられていたかはわかりませんが、穀物でありましょう。ともかくもその年の畑は大豊作であったという設定です。

- ②作物をたくわえる場所 (17)「**そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』**

金持ちはぜいたくな心配をしました。つまり、大収穫となったのは良いけれど、従来の倉では、獲れた作物を収めきれないのです。このままでは作物をたくさん捨てることになってしまうかもしれません。それでは勿体ない。どうしたら良いのでしょうかというところです。



Ultimate Bible
Picture Collection

- ③大きい倉を(18)「そして言った、『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。』」
その時に、金持ちは思いついたのです。貧しければ思い付きもしませんし、思いついてもそれを実行する資力がありません。ところが、この金持ちはこう言ったのです。「あの倉をとりこわして、もっと大きいのを建てて、穀物、財産をみなそこに納めておこう」と。古い倉を壊して、新しく大きな倉を建てるのにはそれ相当の時間がかかるのではといった疑問があるかもしれませんが、イエスのたとえ話を読む時はそうした細部にこだわらず、話の大きな流れをつかむことが大切です。

3. 自分のために蓄えても (19～21 節)

- ①何年分もため(19)「そして、自分のたましいにこう言おう。『たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』」

「自分のたましい」の元の言葉はプシュケーですが、22 節にある「いのち」とあるのも同じプシュケーです。要するに人間がもっている肉体に伴う命と、その存在がもっているたましいを表す言葉です。金持ちは、大きな倉に作物などを入れた後に自分のたましいに向かって、たくさんためることができたから、安心して、食べよ、飲めよ、楽しめと言うというのです。

- ②おまえのたましいは(20)「しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』」

しかし、神の見る眼は異なります。「愚か者」と金持ちは怒られた上で言われるというのです。「お前の地上の命とその存在が持つたましいは、今夜のうちにとり去られるかもしれないのだ、そうしたら、ためこんだものは、誰のものになるのか」と。

- ③神の前に富む(21)「自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」

イエス・キリストは兄弟に遺産分割の仲介に来た人に、これらのたとえを話された上で、この世の財を蓄えただけでは空しく、大切なことは神の前に富む者となることであることを教えられたのです。

《結論》

今朝も三つのポイントで結論に導かれていきたいと思います。

第一に、イエス・キリストは、このたとえ話において、地上での財を蓄えることが否定されているのではないということです。箴言 6 章 8 節には「夏のうちに食物を確保し、刈り入れ時に食糧を集める」とあるように、勤勉に働き、たくわえることの大切さを箴言では何回となく教えられています(10:5、20:4 等)。また、創世記のヨセフは、七年間の豊作時に作物をたくわえておき、後の飢饉に備えることを主から教えられて、それを実行した結果、兄弟たちや父親との再会も果たしました。無駄遣いをせずに、堅実に蓄えること

は勧められていることなのです。実際のところ、たくわえることによって、次の人生が始まるということも確かです。この教会堂建設にあたっては、貯蓄は用いられました。

第二に、このたとえ話での金持ちはなぜ愚か者と言われたのでしょうか。その前に確認しておきたいことは、ここで金持ちは駄目と言われているわけではないということです。金持ちが用いられるということがあります。アメリカ長老教会のある金持ちの夫人は、世界の開拓宣教を視察して、納得した働きについて相当額を献金する働きをしていました。おゆみ野教会誉田チャペルの土地購入にあたっては、そのご夫人は協力されたと聞いています。その夫人の場合は、与えられている財産を主のために用いることを自らの使命と心得てそれを実行していたのです。

それでは、このたとえの金持ちの問題は何でしょうか。豊作で倉を建て替えるというところまでは良いのです。問題はその後で、自らにおかかって、今や蓄えがたくさんあるから、安心して飲み食いを楽しめと言っているところです。つまり、彼は主なる神がもたらしてくれる真の安心ではなく、蓄えに安心を見いだしたからです。主は地上のたましいは、今夜とられるかもしれないから、見えるものに安心の拠り所を見いだすことは愚かだと言われます。この金持ちは、神にではなく財に心が向いていたのです。神の前に富む者となることを願っていききたいものです。

第三に、あなたは、イエス様のこのたとえ話を讀んだ後に、自分は金持ちではないから、関係のない話だと思いませんか。言うまでもなく、この話は金持ちでなくても当てはまることです。要するに、何を頼りに生きているかということが問われているのですから、金持ちであろうとなかろうと、問題点は共通しているのです。大小にかかわらず、世の富を得ると、人はそれに引きずられていきやすいのです。

問題点の第一は貪欲です。欲望にまかせて何かを得ようとするときに、人は最も大切ないのちを見失ってしまうのです。聖書では生まれながらの欲望中心のありかたを肉と言いますが、貪欲はまさに肉です。そして、貪欲にまかせれば、金や財産を得ることに必死になるのです。あなたも、貪欲に引きずられていませんか。第二の問題点は、私たちの身体と存在についての勘違いです。この身体と存在は今夜とられるかもしれないのです。それは金持ちもそうでない者も共通です。そして、自分のために使ったり、蓄えようと必死になることも共通です。あなたはどうでしょうか。

主イエスは、神の前に富むことを教えています。つまり、見えるものを主なる神にささげ、見えない神からの霊的果実や賜物をいただいていく。そして、真の安心と喜びをいただいていく信仰です。誰しも、お金や財に心がひかれます。それが増えれば喜びます。しかし、それに寄りかかれば愚かな金持ちと同じです。だからこそ、自分にとっては、少し痛いと思うほどを、主にささげましょう。そうなれば、優先順序に従って財を用い、余計な贅沢や無駄使いはせずに、「神の前に富む者」への道を進めるのです。